

天 児 慧

### 中国の都市化を考える視座

改革開放路線・近代化の推進は多様な利益集団や階層、利益と権力の関係、新たな社会問題やアクターなどを生み出し、中国の経済、社会、政治構造を大きく変えていった。しかし、そのダイナミックな変容は今なお現在進行形であり、どのような方向をたどるのか、依然として論争的なテーマとなっている。

確かに中国当局の経済近代化政策は、外資の積極的な導入、安価な労働力などのフル活用による労働集約型産業の積極的な推進など発展途上国一般の開発政策そのものであった。しかし、こうした開発型経済近代化の取り組みの過程で、「中国の特殊性」に対応した「特色ある近代化」政策もとらざるを得なかった。そこに中国の都市化を考える場合のポイントがある。

第一に一九五〇年代以降の社会主義実践によって、数々の工業都市、各種の国有企業が存在し計画経済の枠組みができあがっていた。第二に他方で都市のために犠牲となってきた広大な農村・農民が存在していた。第三に都市と農村は戸籍制度、生産・生活などの差異によって基本的には断絶状態に置かれていた。第四に、一九八〇年で人口がほぼ一〇億で極めて低い経済水準にとどまり、先進技術・資本蓄積・人材も極めて乏しかった。第五に広大な統治空間と言語・習慣・生活様式・経済水準などにより顕著な多様性がみられていた。第一〜四の要因は、経済発展戦略は都市と農村で別々に設定しなければならず、一連の流れとしてみることはできなかった。都市と農村が本格的に連動する

ようになったのはWTO加盟の実現した二〇〇〇年代前後からであった。それは多くの農村の若者たちが制度的規制を無視して仕事を求め都市に流入し、都市もまた安価な労働力を必要としていたからであった。

農民の都市への大量流入は他国の発展プロセスと類似していたが、同時に鮮明な相違点も存在している。第一は、既得権益層の多様化と肥大化が、一段と強大化しエリート化した共産党と癒着したことである。第二は、やはり差別的な戸籍制度の問題がある。理屈からいえば二億を超える農民の都市流入は従来の戸籍制度を廃止すべきということになる。たしかに一方で中小規模の都市では、都市・農村一体化した戸籍制度が試験的に導入され始めている。しかし他方で特大都市、とりわけ北京、上海などは都市戸籍取得が一段と複雑化し、その廃止が困難になっている。いわば戸籍制度自体が利権化、既得権益化しているのである。第三は経済成長優先主義が生み出した環境汚染などの深刻な矛盾がある。そして第四に、今日なお中進国の段階にとどまりながらも、膨大な人口増の抑制政策として長期にわたって「一人っ子政策」が採られていたために、まもなく「少子高齢化社会」に突入するといった客観的状況がある。都市化を促進するアクター、都市化のなかで生まれた新たなアクターが、課題の克服のためにどのような思考と行動を起こすのか。中国の都市化を理解する鍵になるのである。

あまこ さとし

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授。専門は、政治学、現代中国論、東アジア国際関係論。2010年4月より早稲田大学現代中国研究所所長。